

椎の葉

上水敬由

五月の連休にヨメさんとふたりで弁当を持って霊巖洞に行った。城の北側から踏切を渡って加藤清正が眠る本妙寺の参道に入る。本妙寺の手前から金峰山をぐるりと半周するように峠道がのびている。旧道はこの南側すこし離れて川沿いを行き、峠のあたりで新道と交わる。

宮本武蔵は死を目前にひかえた身体でひとりこの峠を越えていったのだろうか。それとも洗馬橋あたりから川を下り松尾か河内の船着き場までいったのだろうか。武蔵を連れ戻しにいった藩士たちもはたしてどういう順路をたどったことやら。

前田英樹が言うよりもなお、そういう想像は「私などのひよわで朦朧とした」ものに過ぎない。とはいえ、やはり武蔵にはひとりで峠道を歩いていくうしろ姿が似つかわしい。

参拝をすませた後、近くの休憩所であざやかな緑のなかに腰を下ろして、谷川のせせらぎとウグイスの声に耳をかたむけ、握り飯をほおばりながらそう思った。秋になれば紅葉の葉陰から五百羅漢がにぎやかに旅人を迎えることだろう。

夏目漱石がこの峠を越えたのは武蔵の死後二百五十年ほどのことだという。

帰宅してのち、ふと思いたって『草枕』を読むことにした。

ファンの方には申しわけないが、もとより漱石とは肌が合わないので、これまでに彼の作品をほとんどまともに読んだことはない。若い頃に読んだ『倫敦塔』が印象として残っ

ているくらいのものだ。ただ『草枕』が小天温泉への小旅行を素材にしているという話は聞いていたから、すこしばかり興味を引かれただけのこと。

平野からながめる金峰山は、九州の古い火山がおおむねそうであるように、晴れた日には草木につつまれたやわらかな稜線をみせる。「山路」から見える「バケツを伏せたような峰」などはない。「按摩なら真逆様に落つる」ようなするどい「巖角」もない。

なるほどこれは小説だったのだとあらためて気づく。遠近からわざわざ訪れるものずきのために「峠の茶屋」を用意したりしているので、てっきり紀行文のたぐいと勘違いしていたようだ。

さきに龍南会雑誌を開いて松岡譲の『講演』に目をとおすべきだったか。

高価な御節料理にも似た「名作」についていまさら感想を述べてもはじまらないが、ひよつとしたら、後進たちがこの中から自分の好みのテーマを取り出して、それぞれの作品に仕立て上げたのかもしれないと思う。そういう幸せな時代だったのだ。

なにはともあれ、『草枕』が肝心なところで熊本とかかわりがないとわかったのは小さな収穫だった、としておこう。

ついでながら、彼が歩く二十年前には薩軍がこのあたりを北上して田原坂をめざした。

西郷隆盛は熊本城の東南にあたる白川の対岸本荘の地に陣を構えたが、城を指呼の間に

おさめながらもなぜかあえて渡渉しようとはしなかったという。

足跡をのこした世継宮は、平成の御代になって市の北東立田山のかあなたに遷宮をおこない、いまはマンションの脇に孤立する山門と石碑に名を残すのみである。史跡としての価値が低いためか付近に由来書も添えられていない。

享年はくしくも漱石と同じ五十。それはもちろんそれだけのことだ。